

江吏部集試注 (十七)

木 戸 裕 子

キーワード 大江匡衡、平安漢詩文、一条朝

七十七「述懐古調詩 一百韻」その三

(承前)、(十六)は鹿児島県立短期大学人文学会論集『人文』第三十一号に掲載している。

凡例

- 一、底本は板本群書類従を用い、後述の諸本により適宜異同を挙げた。
- 一、校異では、逐一の異同を挙げるのではなく、本文解釈に関わるものだけを記した。したがって、異体字については挙げていない。
- 一、校異に用いた諸本と略号は次の通りである。

- 内閣文庫(旧浅草文庫)本―(内) 山口県立図書館本―(山)
- 陽明文庫本―(陽) 祐徳稲荷本―(祐)
- 静嘉堂文庫本―(静) 神宮文庫本―(神)
- 国会図書館本―(国) 無窮会図書館本―(無)
- 東大図書館(E45 656)本―(東A)
- 東大図書館(旧南葵文庫)本―(東B) 岡山大学図書館本―(岡)
- 島原松平文庫本―(島) 東北大学図書館本―(東北)
- 京大図書館本―(京) 多和文庫本―(多)
- 賀茂別雷文庫本―(賀)
- 名古屋市立鶴舞中央図書館本―(鶴)

江吏部集試注(十七)(木戸)

本朝文粹(新日本古典文学大系)―(粹)

本朝麗藻(校本本朝麗藻)―(麗)

一、本文の漢字はできるだけ現行の字体に統一した。ただし、次の漢字は底本の字体を尊重した。

煙・烟 花・華 叢・藜 窓・牕 藝・芸など

一、割注など小書の部分は「」に入れて示した。

一、訓読文は必ずしも平安時代の訓みによるものではないが、古辞書類を参考にした。

付記 本稿を作成するにあたっては、東京大学史料編纂所データベース、台湾中央研究院漢籍電子文獻資料庫を利用させていただいた。学恩に感謝いたします。

※本稿(十七)では、江吏部集試注(十五)、(十六)に引き続いて巻中の七十七「述懐古調詩 一百韻」の後半部百五十五句目から第二百句までを取り扱う。前半百二句までに注釈をつけた(十五)は『文献探究』第四十五号に、第百三句から第百五十四句までに注釈をつけた(十六)は鹿児島県立短期大学人文学会論集『人文』第三十一号に掲載している。本詩は百韻と長いため、十句目ごとに上に番号を付している。なお、本詩には今浜通隆氏による詳細な注がある(「述懐。古調詩。一百韻」訳注『本朝麗藻全注釈二』新典社平成十年)。また、後藤昭雄氏による匡衡の伝記『人物叢書 大江匡衡』も本詩を第一次資料として一部の解釈を載せる。

近曾大星見

衆人説誼闕

近曾^{ちかこ} 大星見^{おほほし}え

衆人^{しゆじん}の説^{せつ} 誼闕^{ぎけつ}す

愚儒所管見
 邂逅弁楡躓
 先奏人主寿
 上命宝祚延
 廣言皇子誕
 中闡金環研
 戴眼待殊私
 取魚誰忘筌
 垂耳望廻顧
 相馬豈拘攀
 嗟乎運命拙
 性慵患未鑄
 再為合浦守
 去珠耀又円
 更作武城宰
 割鷄名不悛
 楽道仰鳳凰
 疲学増蟻蝻
 才地多礪确
 詞林少杪楨
 詩句年年積
 菓銚日日煎
 侏儒飽笑我
 文籍拙猶纏
 白屋荒慙人
 伝癖老未痊
 閑居閱史書

愚儒 管見する所
 邂逅 楡躓を弁ず
 先づ奏す 人主の寿
 上命 宝祚 延びんと
 廣いで言ふ 皇子の誕
 中闡 金環 研くと
 戴眼して 殊私を待つ
 魚を取りて 誰か筌を忘れん
 垂耳して 廻顧を望む
 馬を相するに 豈に拘攀せん
 嗟乎 運命拙く
 性 慵くて 患 未だ鑄かず
 再び合浦の守と為り
 去珠の耀 又 円かなり
 更に武城の宰と作るも
 鷄を割くの名 悛めず
 道を楽しみて鳳凰を仰ぐも
 学に疲れて蟻蝻を増す
 才地 礪确多く
 詞林 杪楨少なし
 詩句 年年積もり
 菓銚 日日煎る
 侏儒 飽きて我を笑ふも
 文籍 拙くて猶ほ纏ふがごとし
 白屋 荒れて人に慙ぢ
 伝癖 老いても未だ痊えず
 閑居して史書を閲し

因循情意牽
 承和菅三位
 乘車蘭省前
 応和江納言
 前席玉辺屐
 或賜卿相封
 書窓衣食填
 或賜衣劍飭
 翰林榮華鮮
 徳言尊於唐
 郭隗貴於燕
 桓榮五更問
 万乗臨幸聯
 張良一卷師
 万戸功名鑄
 試題一干文
 心腹尚便便

因循して情意牽かる
 承和の菅三位
 蘭省の前に車に乗り
 応和の江納言
 玉屐の辺に席を前む
 或いは卿相の封を賜り
 書窓に衣食 填つ
 或いは衣劍の飭を賜り
 翰林に榮華 鮮やかに
 徳言は唐に尊ばれ
 郭隗は燕に貴ばる
 桓榮 五更の問
 万乗の臨幸に聯なり
 張良 一卷の師
 万戸の功名を鑄る
 試みに題す一干文
 心腹 尚ほ便便たり

【校異】
 闕一困(底本、内A等二依り改ム) 顧一顔(底本、内A等二依り改ム)
 【押韻】
 闕(先韻 仙韻同用) 躓 延 研(去声霰韻) 筌 攀 鑄(先韻 仙韻同用) 円 悛 蟻 蝻(先韻 仙韻同用) 楨 槓(先韻 仙韻同用) 煎 纏 痊 牽(先韻 仙韻同用) 前(先韻 仙韻同用) 填(先韻 仙韻同用) 鮮 燕(先韻 仙韻同用) 聯 鑄 便

◎近曾ニ近シ。近曾炎旱、人庶憂勞」〔『本朝文粹』卷二「答諸公卿請減封祿表勅」菅原文時〕「近曾聊有欲披陳肝胆無由」〔『本朝文粹』卷七「送以言書」藤原行成〕

◎大星ニ大きな星。寛弘三年春から秋にかけてあらわれた客星のことを指すか。「去三月廿八日、戊子、客星入騎、色白青、天文博士阿倍吉昌奏之」〔『一代要記』一条院寛弘三年〕「六月廿四日、甲午、参内ニ客星ニ勸文被奏」〔『權記』寛弘三年六月二十四日条〕「七月十三日癸丑、ニ定諸道進大星ニ勸文。定申云、道々勸文非一同、又被問不同之由、被御筮卜、可有御祈者」〔『御堂関白記』寛弘三年七月十三日条〕ただし、本詩の製作年を寛弘六年とすると、寛弘三年のことを「近曾」といえるのかどうか疑問が残る。あるいは、『本朝文粹』中の「近曾」の用例が、すべて勅答文、意見封事文や書簡文等の散文中であることを考えると、一五五行から一五九行までの四句は、匡衡が奏上した勸文を引用したものか。

◎喧闐ニ喧闐に同じ。うるさい声が満ちる。騒ぎ立てる。「喧闐夙駕君脂轄 酪酌離筵我藉糟」〔『白氏文集』三〇八七「醉送李二十常侍赴鎮浙東」〕客星の出現に伴ってさまざまな勸文が奏上されたことは、前項の『權記』や『御堂関白記』の記述からもわかる。

◎愚儒ニ愚かな儒者。匡衡の謙称。匡衡が寛弘三年の客星出現について勸文を奏したことは現存の記録類には見えない。

◎邂逅ニ期せずして会う。「野有蔓草 零露漙兮 有美一人 清揚婉兮 邂逅相遇 適我願兮」〔『詩経』鄭風「野有蔓草」〕

◎榆躔ニ榆は輪に通じ、動くこと。躔は日月星がやどること。天体が動くことと宿ること、すなわち天体の運行をいう。「織阿案晷、星變其躔」〔善曰、淮南子曰、織阿、月御也。顔延年纂要曰、景曰晷。呂氏春秋曰、月躔二十八宿。漢書曰、日月初躔星之紀〕〔『文選』卷一九「補亡詩六首」東哲〕

◎人主ニ君主。天子。「以道佐人主者、不以兵強天下」〔『老子』儉武第三十〕「高祖五日一朝太公、如家人父子礼。太公家令説太公曰、天無二日、土無二王。今高祖雖子、人主也。太公雖父、人臣也。奈何令人主拜人臣。如此、則威重不行」〔『史記』「高祖本紀」〕「未旦求衣、欲陳人主思政之道」〔『菅家文章』卷七「未旦求衣賦」〕〔『本朝文粹』卷一にも所収〕

◎上命ニ長命に同じ。

◎宝祚ニ天子の位。天子の寿命。「民忘宋德、雖非一塗、宝祚夙傾、実由於此」〔善曰、宝祚猶宝命也〕〔『文選』卷五十一「恩倖伝論」沈約〕「大嘗会之宝祚、兩度黷画図之屏風」〔『本朝文粹』卷六「為小野道風申山城守近江權守状」菅原文時〕「三十二之宝祚誰論短」〔『本朝文粹』卷十四「一条院四十九日御願文」大江匡衡〕

◎廣言ニ廣はつぐ。続の古字。「躡節 応度」〔傳毅舞賦曰、躡節鼓陳、舒意日広、游心無瑕、遠思長想。郝默舞賦曰、哀則哭踊有節、樂則廣歌有章。男則踊躍逸豫、凌厲矜莊。女則迓委詰屈、窈窕幽房。俯仰應規度、進退合宮商〕〔『初学記』卷十五「舞第五」〕

◎皇子誕ニ一条天皇の第二親王敦成親王を中宮彰子が出産したのは寛弘五年（一〇〇八）九月。客星出現の二年後、本詩製作の一年前の出来事である。「九月十一日、戊辰ニ是日也、午時中宮於左大臣土御門第、御産皇子」〔第二親王也〕〔『日本紀略』寛弘五年九月十一日条〕「九月十日、丁卯、子時許從宮御方如方来云、有惱御氣者。参入、有御気色、仍東宮傳、大夫、權大夫遣消息云、参来。他人々多参。終日惱暗給。十一日、戊辰、午時平安男子産給。」〔『御堂関白記』寛弘五年九月十日、十一日条〕

◎中闌ニ宮中。「殯宮何嘈嘈 哀響沸中闌 中闌且勿謹 聽我薤露詩」〔『文選』卷二十八「挽歌詩」三首 一「陸機」〕「史臣曰、自天寶已降、官握禁旅、中闌纂繼、皆出其心」〔『旧唐書』列伝第百二十五「史臣曰

贊曰」

◎金環 金の腕輪。皇子の誕生を意味する。古代中国では、皇子を産んだ后妃は腕に金の腕輪を着けて他の后妃と区別したという。「静女其變貽我彤管」〔古者后夫人必有女史彤管之法。史不記過其罪殺之。后妃群妾、以礼御於君所。女史書其日月、授之以環。以進退之、生子月辰、則以金環退之。当御者以銀環進之、著于左手、既御、著于右手、事無大小。記以成法〕〔詩経〕 邶風「静女」毛伝

◎戴眼 上を見る、見上げること。戴目に同じ。「使天下之人戴目、傾耳而聽」〔漢書〕「賈山伝」第二十一

◎殊私 特別の恩寵。「臣自入禁司、纒経旬月、未陳薄効、累受殊私」〔白氏文集〕一九七四「謝恩賜衣服状」

◎取魚誰忘筌 魚を得て筌を忘る。「莊子」による修辭。「得魚忘筌」は目的が達成されるとその手段が忘れられてしまうこと。転じて功績があつたにもかかわらず報われないこと。ここでは儒者としての匡衡の功勞がきつと報われるだろうという希望を述べている。「筌者所以在魚。得魚而忘筌」〔莊子〕「外物篇」第二十六「嘉彼釣叟 得魚忘筌」〔文選〕卷二十四「贈秀才入軍五首 四」嵇康

◎垂耳 耳を垂れる。悲しみうれうさま。「飛鳥聞之 翕翼而不能去 野獸聞之 垂耳而不能行」〔文選〕卷三十四「七發八首」枚乗

◎蜀坂垂耳 疲驂豈追絶塵之蹄〔本朝文粹〕卷四「為入道前太政大臣辭職並封戸准三宮第四表」大江匡衡

◎廻顧 振り返る。引き立て。五「八月十五夜陪員外藤納言書閣同賦月照牖前竹窓教」の「廻顧」の語釈参照。

◎相馬 馬の良否を見分けること。「当其貧困時、人莫省視。至其貴也、乃争附之。諺曰、相馬失之瘦、相士失之貧。其此之謂邪」〔史記〕「滑稽列伝」

◎拘攣 物事にひかれてこたわること。拘束すること。「帝知群僚拘攣、難与図始」〔後漢書〕「張曹鄭列傳」第二十五「陋吾人之拘攣飄萍浮而蓬転」〔文選〕卷十「西征賦」潘岳

◎性慵 二「八月十五夜江州野亭对月言志」の「性慵」の語釈参照。

◎患未調 患はやまい。調はとりのぞく。病を治すこと。「患 ウレフ ヤマヒ」〔観智院本類聚名義抄〕法中「調 ノソク」〔観智院本類聚名義抄〕仏中「妖害何因避 悪名遂欲調」〔叙意一百韻〕

『菅家後集』 匡衡は寛弘元年に尾張守の任が満ちて帰京したところから病に悩まされていたらしい。「去年八月十五夜 官吏務以在尾州今年八月十五夜 事湯藥以在江州：性慵病侵官冷齡仄」〔江吏部集〕卷上「八月十五夜江州野亭对月言志」

◎合浦守 合浦は漢代の郡名。真珠の産地であつたが、代々の太守が貪欲であつたため、浦から真珠が消えてしまった。後漢の孟嘗が太守となり、それまでの太守たちの悪政を改めた結果真珠が戻つてきた。

『蒙求』四七三「孟嘗還珠」の故事による修辭。再び合浦の守となるとは、匡衡が寛弘六年に尾張守に再任されたことを言う。

◎去珠耀 合浦に真珠が帰つてきたこと。ここは、匡衡が尾張守として善政を敷いたことをいう。匡衡が最初に尾張守として赴任した長保三年から寛弘元年にかけての功勞に自信を持っていたことは、任期が満ちる寛弘元年に作成した「於尾張国熱田神社供養大般若経願文」〔本朝文粹〕卷十三「其中若有神明不享之吏、不能供養此経、亦不能遂任秩：今年遭洪水、遭大旱。国雖衰、少治術、少貪欲、身雖貧、事不獲已、率由旧儀」などからわかる。

◎武城宰 武城は春秋、魯の地に築かれた城。孔子の弟子、子游が宰守となつて治めた。ここは、前二句と同様、匡衡が尾張守に再任したことをいう。

◎割鶏 鶏をさばくような小さな仕事。国守として小国を治めることをいう。「子之武城、聞弦歌之声。夫子莞爾而笑曰、割鶏焉用牛刀」

〔論語〕「陽貨」

◎不悛_レ悛はかわる、あらためる。「悛 カハル カヘル／＼アラタム ウヤマフ ハ、カル ツ、シム サラニ」〔觀智院本類聚名義抄〕法中

◎樂道_レ道を楽しむ。學問、道德の道をたのしむ。「絃歌復觴詠 樂道知所歸」〔白氏文集〕二九八五「北窓三友」〔況行有余力而猶樂道 志存兼濟而旁接賓〕〔江吏部集〕卷下「暮春右大丞亭子同賦逢花傾一盃詩」

◎鳳凰_レ聖王が出ると現れるという瑞鳥。「鳳凰于飛」〔伝鳳凰、靈鳥、仁瑞也。雄曰鳳、雌曰凰〕〔詩經〕大雅「卷阿」

◎疲学_レ學問に疲れる。倦学に同じ。「今江匡衡倦学也、味聖道而泣四壁之暗」〔江吏部集〕卷上「七言夏日陪藤相城北山莊同賦淡交唯對水詩」〔隔賢路千里疲驂殆黃〕〔江吏部集〕卷中「初冬於都督大王書齋同賦唯以詩為友応教詩」

◎蟻蟻_レ蟻はどぶ貝。中に珠を生じる。ここは、前掲の「合浦守」「去珠耀」を受けて、學者でありながら、地方官として汲々としていることをいう。「淮夷蟻珠倚魚」〔書經〕「禹貢」〔人民死而為介 俛虫化而為蟻〕〔全唐文〕七九六「河橋賦」皮日休

◎才地_レ才能と地位。才知。「王恭字孝伯、光祿大夫蘊子、定皇后之兄也。少有美譽、清操過人、自負才地高華」〔晉書〕「王恭列傳」第五十四「如予者 才地立錐、遥謝刺股之学」〔本朝文粹〕卷八「沙門敬公集序」源順

◎磽确_レ石の多い瘦せ地。「合浦郡土地磽确、無有田農、百姓唯以采珠為業」〔晉書〕「陶璜列傳」第二十七

◎詞林_レことばの林。詩文の林。「奉中葉之詞林、酌前修之筆海」〔李善上文選註表〕「夫和歌者、託其根於心地、發其華於詞林者也」〔古今和歌集〕「真名序」紀淑望

◎杪楨_レ杪顛に同じ。こずえ。「夭矯枝格 偃蹇杪顛」〔文選〕卷八「上林賦」司馬相如

◎葉銚_レくすりなべ。漢方薬を煎じるための鍋。「葉銚夜傾殘酒煖 竹床寒取旧氈鋪」〔白氏文集〕七八五「村居寄張殷衡」

◎侏儒_レ小人。小人物。「侏儒飽笑」は小人物がのさばって學者を嘲るさまをいう。「上知朔多端、召問朔、何恐朱儒為。對曰、臣朔生亦言、死亦言。朱儒長三尺余、奉一囊粟、錢二百四十。臣朔長九尺余、亦奉一囊粟、錢二百四十。朱儒飽欲死、臣朔飢欲死。臣言可用、幸異其礼、不可用。罷之、無令但索長安米。上大笑、因使待詔金馬門、稍得親近」〔漢書〕「東方朔傳」〔侏儒飽笑東方朔 蕙苾讒憂馬伏波〕〔白氏文集〕八五六「得微之到官後書、備知通州之事、悵然有感。因成四章 其三」

◎文籍_レ文書、書籍をいう。「古者伏羲氏之王天下也、始画八卦、造書契、以代結繩之政。由是文籍生焉」〔尚書序〕孔安國

◎白屋_レ白茅で屋根を葺いた家。粗末な家をいう。「雁齒小虹橋 垂簷低白屋」〔白氏文集〕三六五「題小橋前新竹招客」

◎佞癖_レ佞は左伝のこと。史書を好む習癖をいう。「時王濟解相馬、又甚愛之、而和嶠頗聚斂。預常稱、濟有馬癖、嶠有錢癖。武帝聞之、謂預曰、卿有何癖。對曰、臣有左佞癖」〔晉書〕杜預列傳

◎未痊_レ病などが治らないこと。「風情癖未痊」〔叙意一百韻〕「菅家後集」

◎閑居_レ世に知られず静かに暮らすこと。潘岳「閑居賦」〔文選〕卷十六の李善による題注に「閑居賦者此蓋取於礼篇。不知世事閑静居坐之意也」とある。また、白居易は詩題や詩句に「閑居」の語を多用しており、白詩を連想させる語でもある。「風雨蕭条秋少客 門庭冷靜昼多_レ書卷略尋聊取睡 酒杯淺把粗開顏」〔白氏文集〕三六四八「閑居」

◎因循二古い習慣に従って改めないこと。変化をためらいぐずぐずすること。「少時共嗤誚 晩歳多因循」〔『白氏文集』七九「不致仕」〕
 「莫学因循白賓客 欲年六十初归来」〔『白氏文集』三二七二「以詩代書。寄戸部楊侍郎。勸買東隣王家宅」〕

◎情意二情意はこころ、感情。こころがひかれる。「感緒此間牽」〔『叙意一百韻』菅家後集〕〕 匡衡は国史編纂事業を大江家の家業の一つとして捉えていたと考えられる。匡衡の祖父大江維時は撰国史所別当に任ぜられたが、結局国史編纂事業は叶わなかった。この時の資料が大江家に伝えられたらしい。〔山中裕「栄花物語の成立順序について」〔『歴史物語成立序説』東京大学出版会、一九六二、初出『日本学士院紀要』一九五八〕〕

◎承和菅三位二菅原清公を指す。清公は菅原道真の祖父。宝龜元年(七七〇)〜承和九年(八四二)。延暦二十年(八〇一)の遣唐判官に選ばれるなど、儒者としての菅原氏の祖となった。承和六年(八三九)、従三位に叙せられた。この時老齡のため特別に牛車で参内することを許された。〔『続日本後紀』承和九年十月七日条「菅原清公薨伝」〕 〔波戸岡旭「菅原清公「嘯賦」考」〕 〔官廷詩人菅原道真』補篇1第二章〕「正月七日叙。左京大夫。文章博士如元。勅聽乘牛車到南大庭梨樹底。依老病羸弱行歩有艱也」〔『公卿補任』承和六年条〕

◎蘭省二太政官の唐名。「草木愁色、況於蘭省梨園乎」〔『本朝文粹』卷十四「一条院四十九日御願文」大江匡衡〕

◎応和江納言二匡衡の祖父、大江維時を指す。仁和四年(八八八)〜応和三年(九六三)。天曆四年(九五〇)六十三歳で参議に補せられ、天曆九年(九五六)従三位、天徳四年(九六〇)七十三歳で中納言に叙せられた。〔『公卿補任』〕

◎前席玉宸天子の前に伺候する。維時は天慶九年昇殿して、村上天皇の侍読となった。〔『公卿補任』天曆四年、「二中歴」〕 宸は天子のついで

たて。玉で飾った立派なついで。玉座に同じ。「席在金闈内 班排玉宸前」〔『白氏文集』二六〇六「題崔常侍濟源莊」〕

◎卿相封二卿相は公卿のこと。参議以上の官職に賜う封戸。職封。

『延喜式』によれば、中納言は四百戸、参議は八十戸だが、『拾芥抄』では中納言は三百戸、参議は六十戸と減っている。非参議の三位には職封はないが、位封を賜う。『令義解』によれば、正三位は百三十戸、従三位は百戸だが、『拾芥抄』では正三位は九十八戸、従三位は七十五戸とこれも減っている。「凡食封者：太政大臣三千戸、左右大臣二千戸、大納言八百戸〔若以理解官、及致仕者、減半〕」〔『令義解』四禄〕「凡食封者、：中納言四百戸、参議八十戸〔若以理解官、及致仕者、減半〕」〔：納言封戸〔大納言六百戸、中納言三百戸〕〕 〔『拾芥抄』〕「凡食封者、：正三位一百三十戸、従三位一百戸。其五位以上、不在食封之例」〔『令義解』四禄〕「凡食封者、：正三位封〔九十八戸〕、従三位封〔七十五戸〕」〔『拾芥抄』〕

◎書窓二書齋の窓。「可恨未知勤学業 書齋窓下過年華」〔『菅家文章』卷一「臘月独興」〕

◎衣食填二衣食は衣服と食物。生活に必要なもの。ここは俸禄をいう。儒者としての俸禄が十分すぎるほどであること。「故人所善賓客、仰衣食、弘奉祿皆以給之、家無所余」〔『史記』「平津侯主父列伝」〕「見寬貧無資用、常為弟子都養、及時時間行傭賃、以給衣食」〔『史記』「儒林列伝」〕

◎衣劍二衣劍は衣服と劍。卿相の地位にふさわしい服飾をいう。「去喪無所不佩、謂服飾之事、不謂防禦之用。宜定新礼布衣劍如旧、其余如新制」〔『晋書』「志第十」礼中〕「其後漸蘇生、表衣及下襲他、衣・劍・厩馬等修諷誦、劍・馬等奉神社」〔『小右記』長元二年九月二十四日条〕

◎翰林二翰林主人のこと。文章博士の唐名。

◎德言＝蕭德言。唐、長安の人。太宗の貞觀年間に著作郎、弘文館學士となり、東宮時代の高宗の太子侍読となった。老年を理由に致仕を請うたが、学徳を理由に太宗から許されず、爵を賜り陽泉侯に封じられた。高宗が即位した後は侍読の恩により銀青光祿大夫を授けられた。德言以下、郭隗、桓榮、張良の四人はいずれも侍読（帝師）として尊重され高位に昇った者たちである。「蕭德言、雍州長安人。德言博涉經史、尤精春秋左氏伝、好属文。貞觀中、除著作郎、兼弘文館學士。時高宗為晋王、詔德言授經講業。及升春宮、仍兼侍読。尋以年老、請致仕、太宗不許、又遣之書曰、朕歴觀前代、詳覽儒林、至於顔・閔之才、不終其寿、游・夏之徳、不逮其学。惟卿幼挺珪璋、早標美誉。下帷閉戸、包括六經。映雪聚螢、牢籠百氏。自隋季版蕩、庠序無聞、儒道墜泥塗、詩書填坑。眷言墳典、每用傷懷。頃年已來、天下無事、方欲建礼作樂、偃武修文。卿年齒已衰、教將何恃。所冀才徳猶茂、臥振高風、使濟南伏生、重在於茲日。関西孔子、故蹟於当今。令問令望、何其美也。念卿疲朽、何以可言。尋賜爵封陽泉侯。：高宗嗣位、以師傳恩、加銀青光祿大夫」〔旧唐書〕「儒学列伝上」

◎郭隗＝戰国時代、燕国の賢者。燕王が天下の賢人を招こうとした時に「先ず隗より始めよ」と言つたという故事で知られる。「後語、燕昭王即位、卑身厚幣、以礼賢者。郭隗曰宜先尊隗、賢於隗者、豈遠千里。於是築台而師事隗」〔宮内庁書陵部藏蒙求上巻影鈔本〕四一「燕昭築台」

◎桓榮五更問＝桓榮は後漢の人、字は春卿。光武帝の建武一九年に太子となった明帝（顯宗）の侍読となって尚書を講義した。明帝が即位した後は師礼を以て遇された。後、五更に拝され閔内侯に封ぜられた。「桓榮字春卿、沛郡龍亢人也。少学長、習歐陽尚書、事博士九江朱普。貧窶無資、常客傭以自給、精力不倦、十五年不闕家園。：建武十九年、年六十余、始辟大司徒府。時顯宗始立為皇太子、選求明經、乃擢榮弟

子豫章何湯、為虎賁中郎將、以尚書授太子。：顯宗即位、尊以師礼、甚見親重、拜二子為郎。榮年踰八十、自以衰老、數上書乞身、輒加賞賜。乘輿嘗幸太常府、令榮坐東面、設几杖、會百官驃騎將軍東平王蒼以下及榮門生。：永平二年、三雍初成、拜榮為五更。每大射養老礼畢、帝輒引榮及弟子升堂、執經自為下説。乃封榮為閔内侯、食邑五千戸」〔後漢書〕「桓榮丁鴻列伝」

「春卿、五更之間、万乘臨幸其門」〔本朝文粹〕卷六「請特蒙天恩依尾張国所濟功并侍読勞被拜美濃守闕狀」大江匡衡

匡衡が帝師として尊重された桓榮の故事をしばしば自らの詩文に使っていることについては後藤昭雄「大江匡衡の詩文」〔平安朝漢文学論考〕桜楓社、同改訂版勉誠出版、「大江匡衡 卿相を夢みた人」〔平安朝文人志〕吉川弘文館に詳しい。

◎万乗＝万乗の君、乃ち天子のこと。「訓導之礼重又崇、万乗從此化盛」〔本朝文粹〕卷四「為忠義公辭職第一表」菅原文時

◎臨幸＝天子の行幸。ここは、明帝が老いた桓榮のもとにしばしば行幸したことをいう。

◎聯＝聯 ツラナル モトホル モトホシ」〔観智院本類聚名義抄〕仏中

◎張良一卷師＝張良は前漢の人、字は子房。『蒙求』「子房取履」の故事で知られる。若い頃、一人の老人から太公望の兵法書を授かり、これを読めば帝師となれると言われたが、後にその通りに高祖の軍師となった。「漢書、張良、字子房、祖開地文平、皆韓相。良少時從容遊於下邳上。有一老父衣褐、至良所直墜其履圯下謂良曰、孺子取履。良愕然欲歐之、為其老強取之。因跪進父、父以足受之、笑去。里所復還曰、孺子可教矣。乃授良太公兵法曰、読此可為王者師」〔真福寺宝生院藏蒙求下巻古鈔本〕五二七「子房取履」

「子房一卷之師、万戸豊大其賞」〔本朝文粹〕卷六「請特蒙天恩依尾張国所濟功并侍読勞被拜美濃守闕狀」大江匡衡

◎万戸ニ万戸侯、すなわち一万户の封邑を有する侯。張良は、高祖の軍師となつた功績で、万戸侯である留侯に封ぜられた。「漢六年正月、封功臣。良未嘗有戦功、高帝曰、運籌策帷帳中、決勝千里外、子房功也。自扱ニ齊三万戸。良曰、始臣起下邳、与上会留、此天以臣授陛下。陛下用臣計、幸而時中。臣願封留足矣。不敢当三万戸。乃封張良為留侯、与蕭何等俱封」〔史記〕「留侯世家」〔子返初服、猶勝万戸之侯〕〔本朝文粹〕卷六「請殊蒙天恩以所帶榮爵讓親父正六位上忠行状」大江朝綱

◎鑄ニ得ること。「鑄 エル」〔観智院本類聚名義抄〕僧上

◎一千文ニ一千字の詩文。五言百韻の詩なので、千字となる。「狂吟一千字、因使寄微之」〔白氏文集〕六〇八「代書詩一百韻 寄微之」

◎心腹ニ胸と腹。真心、心中。

◎便便ニ肥満したさま。ふくれあがつたようす。「辺韶字孝先、陳留浚儀人也。以文章知名、教授数百人。詔口弁、曾昼日仮臥、弟子私嘲之曰、辺孝先、腹便便。嬾讀書、但欲眠。韶潜聞之、応時対曰、辺為姓、孝為字。腹便便、五経筍。但欲眠、思経事。寐与周公通夢、静与孔子同意」〔後漢書〕「文苑列伝」

【通釈】

近年大きな星が現れ

たくさんの人々があれこれと自説を述べ立てた

私は狭い見識からではあるが

星の運行の巡り合わせをお解きした

まず始めに我が君のご長寿と

御代の続くべきことを申し上げ

ついで皇子のご誕生になり

宮中では母后を賞賛申し上げるだるうことを奏上した
これらが実現したので、私は特別の恩寵を仰ぎ待つのである
魚を捕らえた後でどうして魚捕りのわなが忘れられることがあるか

ただひたすら耳を垂れて君のお引き立てを期待する
馬の良否を鑑定した後でどうして馬を拘束し苦しめておくことがあろうか

(そのように、功有り才有る者がどうして報われないことがあるか、わが君は必ず報いてくださるのである)

ああ、しかしわが運命は拙く
性質は怠惰で、病はまだまだ良くならない

この度再び尾張の守に任ぜられ、後漢の孟嘗が合浦で善政を敷いたごとく

治国につとめ、姿を消した真珠が再びまどかな輝きを見せるように
励んでいるいる

武城の宰守となつた子游のごとく、尾張の地を治めているが
あいかわらず、鶏をさばくには不似合いな大きな刀を振るつてい

るといふ評判を甘受するのだ(国守の仕事に儒者としての見識は不釣り合いだと言われる)

学問の道を楽しみながら聖天子の出現の瑞兆である鳳凰を仰ぎ見て
いる(わが君の仁徳を仰いでいる)が

実際には学問に疲れて汲々と国守の仕事にいそしむばかり(君のお側にお仕えることもない)

わが学才は石だらけの痩せ地のように貧しく
わが詩才は梢もまばらな林のように寒々しい

それでも詩作は年々増えていくが
世に認められることもなく葉を煎じる毎日だ

侏儒のごとき小人物は学問に飽きて学者たる私を笑うが

か

拙いながらもやはり書籍を身辺に置き学んでいるが

恥ずかしながら粗末な我が家は荒れ果てているが

歴史好きの性癖は治ることがない

ひっそりと暮らしつつ史書を閲読しては

祖父が志した国史編纂のことを考え、私もいつかはと思わずにはい

られない

思えば承和年間の菅三位清公卿は

学問の功で老齢の身を車に乗せての参内を許された

応和年間の江納言維時卿は

侍読の勞で中納言となり天子のお側に伺候することができた

この二人はあるいは公卿として職封、位封を賜り

書齋には衣食が十分すぎるほどに満ちていた

また官位にふさわしい服飾を賜り

文人としての栄華を世に示した

漢土でも蕭徳言は唐太宗に重んぜられ、高宗の太子侍読となり高位

に登った

郭隗は賢者として燕王に尊ばれた

桓榮は後漢の明帝の侍読として下問に答え五更に拝され

老いてなお天子の行幸にあずかった

張良は兵法書一卷で漢の高祖の軍師となり

留侯に封ぜられ一万戸の封邑を領有し功名を得たのだ

(そのように古今、本朝でも漢土でも帝師となった者は特別な恩を

蒙り卿相の位を拝した)

試みに百韻の詩を作りわが心情を述べてみたが

心の中はまだまださまざまな思いでいっぱいである

(わが君の侍読を勤めた私はいつになったら先例を踏襲できるの

(二〇〇八年 十月一日 受理)